書

Kan-un Yokota (Kyozo Yokota)

「變古爲今」

2011年　68×17cm

素材：画仙紙・油煙墨

書体：篆書

作者の言葉

「變古爲今」

横田閑雲（本名：恭三）

今さら説くまでもないが、過去・現在・未来は連続している。今を生きる我々にも過去があり、未来がある。人がどう生きるべきかは、はるか昔から議論されてきたことであるが、例えば、老子は「柔弱は剛強に勝る」「善く戦う者は怒らず」「足るを知る者は富む」と達観し、荘子は「白駒　隙を過ぐ（家の中から、白馬が通りすぎるのをちらりと見たが、人生もこのようにアッという間に過ぎてしまう）」と人生のはかなさを述べつつ、「偃鼠河に飲む（どぶ鼠が大河で水を腹一杯飲んでも所詮たかがしれている。人間も各々その分に安んずるのがよい）」と人間の欲望を戒めている。これらは、科学の発達した現代にも通じる含蓄のある言葉である。このように“どう生きるべきか”は、おそらく人類が人間として喜怒哀楽を自覚したときから、ずっと途切れることなく思考されてきた最も深遠なテーマといえよう。

3. 11東日本大震災とその後の巨大津波を目の当たりにしたとき、被災者は勿論のこと、日本に暮らす大多数の人が“生きる”ことの意味を改めて問い直したはずである。

◇

ここに掲載した「古を変じて今を為る」は、清の馮班が元の趙子昂の用筆について評価した語句（『鈍吟書要』所収）であるが、書のみならず、広く芸術一般に共通した評語と捉えたい。さらに一歩踏み込んで、この四字句には人間としての生き方をも示唆するメッセージが秘められている、と言ったら穿ちすぎだろうか。いずれにしても、過去から学びつつ、その一方で過去から脱却した“今”をつくりあげたいと考えている。

なお、書体は篆書の範疇に入るが、これは中国古代の墓葬内に副葬された簡牘の文字を素材にして創作したものである。